

JOMA 通信

Japan Overseas Missions Association

海外宣教連絡協力会公報

No. 33 発行者/芳賀 正

海外宣教連絡協力会事務局

東京都杉並区高井戸東2-25-11-308

☎168

Tel. 03 (335) 3049

郵便振替 東京 6-106631

1989年3月20日発行

宣教師の発掘と養成

ディビッド・カミングス (国際ウイクリフ聖書翻訳協会会長)

— 1988年度 JOMA セミナー講義より —

講義 I

「地域教会の世界宣教への使命」

1 旧約時代

(1) 人類の創造と共同体

神は創造の初めより、神と人、人と人との間の健全な交わりを願い、調和のとれた共同体の拡大を意図されていた。

(2) 共同体の破壊と再生

罪の故に、その二つの交わりは破壊され、社会は腐敗した。サタンは共同体の拡大を望まなかった。ノアを通じて共同体回復の試みがなされたが、大きな成果が見られなかった。

(3) イスラエル民族と神の祝福

アブラハムの召命(創世記12)に見られる二つの命令に注目したい。「行きなさい、あなたを大いなる国民(共同体)とする。」「あなたの名は祝福となれ。」小さなイスラエル民族を通して神はご自身の祝福を世界に広めようとされた(出エジプト記19:5、6)。

(4) イスラエルの不従順

しかし、異邦人の光となるべきイスラエル民族はやがて自己満足に陥り、本来の使命(諸国民への証し)を果たさず、神の祝福の源にはなりえなかった(エゼキエル5:5、イザヤ56:5)。

2 新約時代

(1) 教会の責任と使命

神の救いの計画は不変だが、遂行の方法が変わった。旧約時代には神殿そのものが重要であり、諸国の民は神殿に引き寄せられた。しかし、今やキリスト者が神の宮としての大切な使命を持つ。

キリスト者によって構成される新しい聖なる共同体<教会>を通じて、すべての造られたものに神の御旨である(使徒1:8)。四福音書と使徒の働きに与えられている至上命令<主の証人となれ>は、弟子たちの選択に任されていたのではない。証人は殉教を覚悟していなければならない。

教会はイスラエル民族に代わるこの自らの使命を自覚していかねばならない(1ペテロ2:9参照)。

(2) 教会と宣教団体

新しい共同体としての教会がなすべき活動は a) 礼拝、b) キリストの弟子をつくること、c) 出でて福音宣教に従事すること(共同体の拡張)の三つに要約される。

教会は宣教のための神の器であり、宣教団体は教会の働きの拡大延長線上にある。自らが属する共同体である教会から離れた宣教団体独自の働きはありえない。ゆえに、教会と宣教団体との間には、派遣と活動報告という相互関係がなければならない(使徒14:27)。

やがては、神の国になるキリストの共同体を拡張するために地の果てまで出ていこう。

「地域教会内の宣教意識の向上」

地域教会の宣教意識向上のために重要な二つの分野がある。教育と霊的啓発である。

1 教育

(1) 世界宣教の現状を教える

1947年、発展途上国の99%は植民地であった。しかし、1972年にはその99%が独立した。欧米の宣教師は以前と違い、宣教地に入ることが難しくなった。ウイクリフ聖書翻訳協会では、ビザ取得のための専門家を置いているくらいである。今は、単独で宣教地に乗り込み、活動するだけでなく、チームを組み多様な働きを担っていくような宣教活動が求められている。宣教師訓練においても、専門技術を磨いたり、高等教育を受ける必要があることについて、教会の理解を深めていくことが大切である。

(2) 世界宣教に費やす時間の長さを教える

西欧の教会は効率追求が第一となっている。しかし、宣教には時に長い時間が必要である。フィリピンの首刈り族で働いた宣教師は17年間で、わずか2、3名の回心者しか得られず、その上奥さんは病気で召された。しかし、その宣教は無駄ではなかった。現在その部族には12、000人のクリスチャンがいる。

イエスの四つの種の例えのポイントが、良い地になるための開墾であったように、世界宣教は長い年月を要することを教会に教える必要がある。

(3) 多くの教会が迫害下にあることを教える

迫害下で宣教師として働くことは、痛みと困難の伴うものである。その一つに、イスラム圏宣教がある。エチオピアなどでも教会は迫害の中にある。けれども、教会は成長し、聖書を教える指導者を求めている。

(4) 指導者の世界宣教の取り組みを模範として示す

単に知識として世界宣教を教えるのではなく、指導者が世界の失われた魂のために労すること、それ自体が大切な教育となる。パウロのように、私のようになってほしい、と言える指導者でありたい。

2 霊的啓発

(1) 宣教師が神のなさったみわざを報告する
世界宣教についての教育は、霊的な啓発によって命が吹き込まれる。その大切な役割を担うのが、宣教師による報告である。

しかし、悲しいことに、神がなされた事柄よりも宣教師がヒーローであるかのような報告がなされることがある。パウロは送り出してくれたアンテオケ教会で神がなされたみわざを報告している（使徒14章）。私たちは、神がしてくださったことがらを聞くときに初めて、霊的啓発を受けるのである。

(2) 宣教地の人々について報告する

グアテマラで働く二人の宣教師は、1954年から旧約聖書の翻訳を始め、最近完成した。宣教地のクリスチャンたちはゲリラの攻撃や様々な困難に直面した。しかし、翻訳された詩篇を読むことによって、大きな慰めを得たという。私たちも、このように宣教地の人々について聞くことによって、霊的に啓発されるのである。

(3) 賜物を発見する

ニュージーランドのある教会では、役員会が集まり、特定の青年のことを考える時を持っている。その青年にはどんな賜物が与えられているか、折り、話しあい、直接青年に「あなたは宣教師に導かれているのではないか、生涯を主におささげしてみてはどうか」と声をかけるという。

各自の賜物は、教会によって見出だされ、教会によって励まされる必要がある。このようにして、賜物を発見していくならば、そこに大きな霊的な啓発が起きる。

このように世界宣教について教え、また同時に、霊的啓発をしていくことは、地域教会の宣教意識向上に非常に有益である。

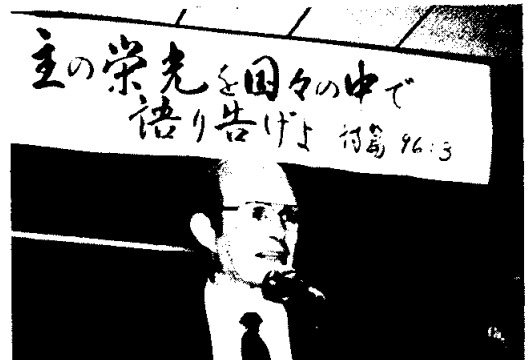


写真 講演中のD・カミングズ師

講義Ⅲ

「地域教会における世界宣教のプログラムと訓練」

1 目的を明確にする

私たちの内的な動機としての「目的」を明確に持つことは、何にもまして重要である。

地域教会の目的は、礼拝と弟子化のための訓練、そして宣教である。教会として、特に宣教についての目的を明文化していることが求められる。教会の宣教のビジョンは、何よりも神の宣教についての目的を知るときに生まれる。神は、モーセに対して「私は民のうめき声を聞いた」と語られた。私達キリスト者は居心地よさに安住してしまいやすいが、神の目的は「私はあなたをイスラエルの民に遣わす」ことであった。世界宣教へのビジョンを持つために教会の役員たちと、教会の「宣教目的」を時間をかけて話し合っただけで明文化することをお薦めする。

2 神から受けたビジョンを伝達する

(1) 事実を見出し伝える

宣教団体のニュースからの情報を伝えること、休暇中の宣教師を招いて宣教報告をしてもらうこと、宣教団体の関係者を招きセミナーを開催すること、若い人たち対象の宣教キャンプを開くこと、役員と共に宣教地を訪問すること、教会内に宣教委員会を設置すること、などを通して教会内に、宣教についての情報を流し、関心を捉えることが大切である。

(2) 牧師自身が明確なビジョンを持つ

どんなに宣教委員会を設置していても、牧師自身が宣教についてのビジョンを持ち、絶えず講壇から語られていないと、会衆がビジョンを持つことはできない。

(US Center for World Missionから出版されている“Perspective”は、教会に宣教への関心を持たせるためのアイデアが豊富に紹介されている格好のハンドブックである。)

3 羊の世話をする

教会の牧会者として、教会を宣教の教会としていくために必要なことは何か。

(1) 熱心さ

神は、ひとり子をご自身の宣教のためにお遣わし下さるほどに宣教について熱心であられた。その神の熱心さにならって、宣教に熱心なものでありたい。生半可な態度で牧会しては生半可な会衆しか育たない。

(2) 忍耐

短時間で宣教の重要性を教会員全体が理解することは考えられない。時間をかけて、宣教の大切さを教え、導く必要がある。

4 教会の宣教訓練プログラムを管理する

一年に一度程度の宣教大会を開くことが、宣教訓練のプログラムのすべてであったとしたら、大変不十分である。たとえば、CSの子どもたちも宣教師のために祈る機会が与えられる必要があるし、若い人たちには、生涯を宣教のために用いることへのチャレンジがなされる必要がある。宣教委員会を教会に設けることも大切である。

(アメリカのAssociation of Church Missionary Committeesでは、教会内の宣教訓練プログラムを考えるための様々な参考資料を作っているのだから、参考になる。)

5 聖霊の力をいただく

指導者として、教会の宣教訓練プログラムを実施するに際し、私達自身の力ではなく、宣教の主である神の力をいただいて初めて、その務めを全うできるのである。

終わりに

世界宣教に参加することは、神の目的に従うことである。しかし、別の面から言えば、教会は宣教命令に従うことによって、教会の歩みを健全に保つことができるのである。エルサレムの教会は、当初、主の宣教命令を実行に移していなかった。その結果、食料の配分の問題や、聖霊に対して偽るといような問題が起きてきた。しかし、ステパノの殉教、教会への迫害などを通して、各地で宣教活動が展開され始めたとき、教会の関心は宣教そのものに移っていった。宣教のビジョンを持って実行している教会は、教会自体が祝福のうちに守られるのである。

宣教師としての訓練—何が必要か

(JOMAセミナー・パネルディスカッションより要約)

木下理恵子(OMF台湾派遣宣教師)

宣教師としての実際の経験から、宣教師としてよりよく奉仕するためには、次のような訓練が必要であるように思う。

1 自分を知る訓練

①性格・人格・気質(長所・短所、注意すべき所、変えられるべき所)

②肉体(体力はどのくらいか、睡眠時間など—健康管理についても)

③情緒的反応の傾向性(いつ、どのような事で怒りやすいか、怒るとどういう行動をとるか、おちこみの原因は何かなど)

④人間関係での傾向(好き嫌いが激しい? 広く浅く? 仕事中心。など)

⑤どんな賜物を与えられているか(伝道・宣教・牧会・カウンセリングなど)

⑥どのようにリラックスするか(運動・音楽・散歩・生け花・趣味など)

(自分を知るためには、①客観的に、意識的に自分を観察する。②他人と住む(正直に言ってもらえるだけの人間関係を築く訓練)

2 相手を知る訓練

①異文化伝道とは何かを知る(宣教学、人類学、言語学、カルチャー・ショックなど)

②柔軟性を持つ(自分のやり方、考え方が絶対に正しいのではなく、相手の違う意見・やり方を尊重できるか、受け入れられるか、それを一緒にやっていけるかなど。)

③英語力と自分の意見を表現できる訓練(日本人宣教師として、欧米の宣教師に貢献できるように)(相手を知るためには、宣教学、異文化伝道の学びが大切。また、外国生活の経験も役立つ。成熟した人であれば、若いうちに宣教地に出ていくことが良い。)

3 神を知る訓練

①聖書の学び(聖書の真理を実生活に適用できるような学びが大切)

②静思の時の確立(他に頼れるものがない中で、神から力をいただく方法を身につけているか。聖書から糧を得ているか。)

③救霊の情熱を消さない訓練

(神を知るためには、聖書学校での学び、早天祈禱会の前の個人の静思の時の確立が必要、また個人の静思の時の内容充実を自己訓練することが大切である。)

香港から日本に宣教師として遣わされて

盧佩虞(ロー・ブイ・ユ)



私は6人兄弟の5番目に生まれ、私の8才の時に母がガンで亡くなりました。それ以来、死ぬことを非常に恐れるようになりました。死んだらどこへ行くのか、誰も答えてくれませんでした。それゆえ、生きる目的も分からず、何年間も熱心にお寺に通って平安を祈りました。しかし依然として恐れと不安を持ち、空しく、希望がありませんでした。

1977年にカナダに留学する機会を与えられ、クリスチャンの家庭に滞在するようになりました。自分にはない愛と喜びをそのクリスチャン夫妻の内に見出し、感動を覚えました。ある晩その夫人が聖書を開き、私がそれまで聞いたことのない話をしてくださいました。イエス・キリストが私を愛し、私のために十字架に死なれ、その流された血潮によって私の罪は赦されたというのです。私は、なぜ今まで自分が恐れと空しさの中に生きてきたかが分かりました。神さまに対して罪を犯していたからです。その夜初めて、私は神さまに祈りました。「主よ。私は喜んであなたに心を開きます。どうぞ私の心にお入りください。そして私の罪を洗い清めてください。」すると、平安と喜びで心が満たされたのです。主を信じて以来、人生が変えられました。しかしなおも私は自分の思い通りに生きようとしていました。

1977年にカウンセラーとして子どものキャンプに参加した際、子どもたちが変えられていく様子に接し、多くの変えられるべきいのちがあつて、主は私たちをそのために用いたいと願っておられることを知りました。野心を捨て難く思う私の心に葛藤がありました。マタイ16:26のみことばにチャレンジを受け、神さまのために働くこと以外、永遠に残るものはないことを理解したのです。そして、「主よ。用いてください」と祈った時に、平安と喜びが戻ってきました。主に仕える備えとして、聖書学校で学ぶ決心をしました。2ヵ月間に3つの祈りが答えられ、私は主の導きを確信しました。1) 父の同意が得られたこと。2) 申込が遅れたにもかかわらず、プレリー聖書学院に入学が許されたこと。3) 一年分の学費が与えられたこと。自分の思いを捧げたその時にこそ、神の御力が完全に現れることを、これらの出来事を通して学びました。

聖書学校での4年間に、海外宣教への関心を与えられ、日本人の級友を通して日本における働きの必要を知るようになりました。日本人の間で奉仕する機会もあり、重荷は増していきました。開拓伝道に重荷を持つ私に、卒業後主は、香港での教会奉仕の経験を与えてくださいました。親しい人たちから離れることや、異文化適応、言葉の学びなどを考えるたび、自分の足りなさを覚えましたが、ゲツセマネでの主の祈りを思い、主に委ねてきました。

現在、日本にあつて言葉の学びと文化適応に苦勞する毎日ですが、神の全きみこころの中にいることに優る大いなる喜びはありません。私が、主に用いられる謙遜な僕となるようにお祈りいただけたら幸いです。(香港福音自由教会派遣宣教師)

— J O M A 加盟団体および宣教師の動向 —

アジア福音宣教会 白井澄子師は一時帰国して巡回した。松元セツ子師は引き続き台湾で奉仕する。

鷹羽富美子師は4月に帰国、数か月巡回報告の予定。

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団海外伝道部 木村詔子師は2月帰国。佐々木正明師は6月帰国の予定。佐藤信子師はマカオで中国人伝道のため準備中。

アンテオケ宣教会 森敏師は4月にネパールに再赴任。切山晶子師は4月にスリランカに再赴任。熊井祐作師は直腸部腫瘍の手術を受け、加療中。長沢久美子師は3月に帰国、半年間巡回の予定。

日本ウイクリフ聖書翻訳協会 野沢道世師は2月19日ニューギニアに向け出発。松村隆師は2月25日にインドネシア(イリヤン・ジャヤ)に向け出発した。永井康子師は3月にオーストラリアへ。土井彰師もインドネシアに近く出発。真鍋孝師は3月でウイクリフ宣教師を辞任し国内で牧会へ。田口勇新師は7月に出発予定。虎川清子師は7月帰国予定。高田正博師は10月帰国予定。

キリスト兄弟団海外宣教部 在米日系人伝道のために準備中の佐藤恵一宣教師を支える会が先ごろ発足した。

国際福音宣教会(OMF) 帰国中の木下理恵子師(日本ホーリネス教団委託)は10月台湾へ再赴任の予定。牧野直之師は3月、福音主義医療関係者の集会の講師として一時帰国。野尻孝篤師は帰国中。今後の奉仕は未定。小川国光師(日本福音自由教会委託)はアメリカにて研修中。今後の奉仕は未定。

聖書同盟 岩井満師は7月にインドネシアで短期奉仕の予定。

東洋ローアキリスト伝道教会海外宣教委員会 中華ローア基督福音教会の役員研修会講師に江城師を派遣する。香港教会には小野寺師が巡回を継続する。

南米宣教会 佐藤浩之師は3月に休暇のため帰国。中田智之師は本拠地をマナウスからペロ・ホリゾンテに移して伝道開始。マナウスに赴任した馬場千恵子宣教師(神奈川県聖書福音教団青葉キリスト教会出身)は元気に奉仕中。

日本福音自由教会海外宣教委員会 横内澄江師はこの夏から秋にかけて一時帰国の予定。フィリピン赴任予定の島先克臣師は各地を巡回中。

日本ホーリネス教団海外宣教委員会 平田金次郎師は台湾に再赴任した。ブラジル日系人伝道のために大前信夫師が4月出発予定。

「宣教のアドベンチャー」第2集

日本ウイクリフ聖書翻訳協会発行

4年前に発行された第1集に続いて、ウイクリフ聖書翻訳協会に属して奉仕しておられる宣教師の証し集が発行されました。20人のメンバーが、その貴重な体験を記しています。特に、開発途上国における生活へ適応する苦勞が分かります。日本では経験できないような現地の人たちとの暖かい交流の証し心が和まされます。また、第二次大戦の戦場となった場所で心を遣いながら奉仕する宣教師の姿が印象的です。

そのような中で現地語に聖書が翻訳され、主を信じる人々が起こされていく喜びが綴られています。公用語の聖書だけではなく、現地語の聖書がなぜ必要かという問題についても、示唆が与えられます。現地の言語がいわゆる文明国の言語と比べて決して劣った言語ではない事実も紹介されています（神が人類を創造なさったことの一つの傍証です）。

また、教育宣教師という特殊な分野での働きの紹介もあります。宣教師の子弟教育の困難さにも考えさせられます。アジア太平洋地域で西欧の宣教師に代わる日本人宣教師の存在の重要性なども教えられます。国際宣教団体に属することについての考察なども紹介されており、これから日本の教会が海外宣教に取り組みにあたり、様々な問題提起がなされています。数年後に発行されるであろう第3集を期待します。（稲垣博史）

（A5判36頁 領布価200円 手に入れたい方は、日本ウイクリフ聖書翻訳協会（〒168 東京都杉並区浜田山4-31-7 ☎03-313-5029）へお申し込みください。

— JOMA 1989年度総会のお知らせ —

日時 1989年4月17日（月）午後1時より4時まで
会場 御茶水学生キリスト教会館213A号室
特別講演 「今、世界の宣教は」 ナイジェル・シルバスター氏（国際聖書同盟総主事）

（オブザーバー希望の方は事務局までどうぞ）

JOMA 宣教地図をお持ちですか

1988年2月に発行した、日本の教会から派遣されている海外宣教師の写真と住所入りの宣教地図がまだ、多少残っています。入手ご希望の方は、早めにご連絡ください。

＜一部250円 送料170円（2部以上は実費）＞

1988年度会計報告

		88年度修正予算	89年2月末現在
収入部	会費	576,000	530,000
	献金	100,000	87,970
	セミナー特別献金	120,000	80,000
	雑収入	160,000	288,387
	前年度繰越	20,842	20,842
計		976,842	1,007,199
支出部	セミナー費	200,000	199,878
	文書費	210,000	146,580
	役員会費	40,000	16,575
	事務所費	300,000	300,000
	事務費	100,000	79,624
	総会費	20,000	14,980
	総主事準備金	100,000	0
予備費	6,842	0	
剰余金		0	249,562
計		976,842	1,007,199

事務局デスクより

昨年は、沖縄や栃木で超教派の海外宣教の大会が開かれた年でした。少しずつですが、教会の間にたがいに世界宣教について協力しようという気運が盛り上がっているように感じます。

日本福音同盟発行が発行している英文公報誌「Japan Update」1988年2月号で、宣教師訓練センター所長の奥山実師が、日本の教会の海外宣教について書いておられます。それによりますと、現在日本から遣わされている宣教師は、63の団体から、36の国へ291人という数に上ることです。10年間で宣教師の数は2、2倍の増加であるという統計が紹介されています。

（本号のJOMAセミナー講演等の要約の責任はJOMA役員会にあります）